親鸞とその妻

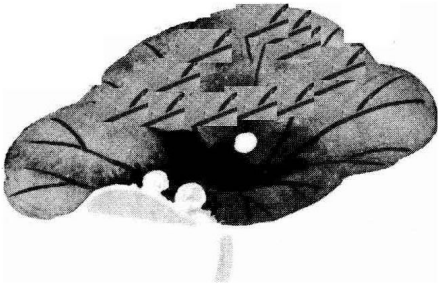
二

吉水時代

親鸞とその妻

吉水時代

丹羽文雄



新潮社版

親鸞とその妻（第二巻　吉水時代）

昭和三十三年七月一日　印刷
昭和三十三年七月五日　発行

定価　二六〇円
地方売価　二七〇円

著者　丹羽文雄

発行者　佐藤亮一
東京都新宿区矢来町七一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(34)〔代表七一一一(九)〕〔代表六一〇一(五)〕
振替　東京八〇八番

（乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。）

印刷・扶桑印刷株式会社　製本・新宿 加藤製本所
© by F. NIWA 1958 TOKYO Printed in Japan

目

次

残月……七
桃の花……三
最初の結婚……三五
続最初の結婚……四八
異端者……五〇
暗雲漂う……五九
署名僧綽空……五〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

書写……一〇九
改名親鸞……一二四
法難……一四〇
続法難……一五四
悩乱する親鸞……一七一
訪れる人……一八六
送使……二〇二

装幀・挿絵　岩田正巳

親鸞とその妻　第二巻

——吉水時代——

残月

屋内は闇一色であり、あたりは静寂の底にあった。屋外が、僅かに明るい。人々はまだふかい眠りの中にあったが、すでに屋外の東山一帯には、朝が訪れているようである。が、早朝の明るさにしては、弱すぎた。それは、残月が山の端にかくれようとして、弱々しい光りを残しているにすぎないのだった。綽空は、物音を殺して土間に下りた。やがて、台所の一点に火がもえはじめた。綽空は、竈の前にうずくまっている。音をたてて燃え上る焔が、綽空の顔を塗りつけたように赤く反映した。思いなしか、お山では見られなかった、おだやかな顔つきである。朝早く台所で働くことは、比叡山の堂僧生活で、永年慣れていた。働くことにはほとんど無神経になっているが、ここでは、綽空は心の底から満足をして働いている。やがて、誰かが起き出して来たようである。

「お早よう、綽空房。いつも早いね」

綽空は、立ち上って頭を下げた。輪慧が綽空の働きぶりをよろこんでいることは、綽空にも判っていた。心からよろこんで働いているのを、もっとよく輪慧に知ってもらいたいと思う。

輪慧は四十を越えているらしい。輪慧は、吉水の禅房の台所の責任をひきうけているひとであった。初対面の時、綽空は輪慧の中に、お山の雪半と共通したあるものを感じた。雪半のように毒舌家ではなかったが、何となく信頼がおけるような気がした。たれに対しても、第一印象では、これまで綽空はそれほどまちがいはやっていないのだ。お山では、雪半と親しくなり、吉水に来れば、また輪慧のような年配者と親しくなれる己の幸運を、ひそかによろこんだ。

「綽空房は、働くことがいかにもたのしいらしいね」

「はい、感謝の心持で私は働いております」

「綽空房には、一般の僧とはちがったところがある。私はそれに感心をしているよ」

綽空には、心あたりがなかった。とんでもない誤解をうけて、感心されているのでは困るのだ。

「師の坊の高潔な人格と、強い信仰に感化されて、入門をする僧も数えきれないくらいだが、新しくはいってくる僧は、一日も早く師の坊の話をききたがる。無理もないことだが、綽空房だけは、ちがっている。いっこうに師の坊の話を聞こうとしないではないか。他の僧は、そのためはたらくことがおろそかになるが、綽空房は、その点実に誠実だ。綽空房だって、師の坊の話はききたかろう。それを、綽空房はじっとがまんをしているらしい。私は、師の坊について、西山の広谷から、ここの吉水に移って来た人間だが、その間にはいろいろな人に出会っている」

綽空は、面映くなる。赧くなった顔を、窯の焰が勢いよく舐めるようであった。綽空にしたところで、法然の話を直接ききたかった。入門が許される以前のように、禅室の庭に坐して、法話をききたいと思っている。が、入門を許可された身としては、法話をきく前になすべき任

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

務がひかえている。綽空の気持は、謙虚だった。つとめてそう自分を持しているのではなかったが、性格がそうさせるのだった。法然がこの家に起居している、その中に自分も同じに起居しているということを、しみじみありがたいと思っている。そのよろこびに、当分はこのままの状態でひたっていたかった。新参者の身をかえりみず、ひとを押しのけて、法然のそば近くにまかり出る真似は、綽空には出来なかった。それに、綽空には、まだよくこの家のようすが判らなかった。出入する弟子達の名前も知らない。綽空は、まだ一度も法然と直接口をきいたこともなかった。すでに数日が経っていたが、口をきく機会がなかった。綽空には、法然が雲の上の人のように遠い存在であった。それにもかかわらず、一つ屋根の下に起居しているのである。この思いだけで、綽空は満足である。吉水の禅室に入門したことは、やはりよかった。お山では軽くみられ勝ちだった僧侶の生活だけが、ここではすべての生活であった。それ以外にはなかった。それはまた、僧として第一義の生活であった。

「いったい門弟の数はどれほどあるのでしょう？　私には、見当もつきません」

「私も、正確に数えたことはないが、二百人近くはいるだろう。門弟とはっきり関係のわかっている人だけでも、そのくらいはいるだろうね」

それだけの人数が、つねにここに起居しているわけではなかった。

「弟子の全部が、僧というのではない。僧でない人もずいぶんいる」

綽空が入門を求めたとき、叡山の堂僧と知って躊躇を示した僧は、住蓮（じゅうれん）という名であることを知った。その後、綽空は住蓮と口をきくこともなかった。綽空が入門を許されて、この家の人間になってしまうと、住蓮の目にはその存在もみとめられなくなったようである。住蓮はつ

ねに、法然のそばにいる人であり、綽空は台所の人間である。顔を合わせる機会がすくなかった。同じ門弟とはいえ、住蓮はいわゆる高弟だった。法然には、門弟の序列をつける意志はなかったにしても、門弟の間には自然と序列が守られていた。

「寺を預かる僧で、ここの門弟となっている方も、たくさんいる。それらの人々は、自分の寺にかえって、師の坊の教えをひろめている。また、寺を持たない僧もかなりいる」

と、輪慧が教えてくれるので、綽空には、この家の組織がだんだんと理解出来た。

門弟として、特別に法然から教えをうけるという機会はなかったが、綽空は仕事が一応片づき、法話が行われている場合には、こっそりと人々のうしろで聴いていた。さまざまな職業の人にまじって、聞いていた。

「……弥陀の本願の前には、智徳のたかい人も、聖者も、愚悪な凡夫も、富めるものも、貧しいものも、位の高い人も、いやしい人も、すべてがありのままの姿で救われるのである。私達は、すべて自己のはからいを捨てなければいけない。そして、ひとすじに仏の願力にたよることである。恰度幼い子供が、母の胸に抱かれて、その名を呼ぶように、私達はすなおに仏の親心を信じて、その御名をとなえなければならないのだ」

法然はくりかえし、おのれのはからいを捨てよと言った。自己計量をするなという。幼な子が母の胸に抱かれて、母の名を呼ぶには、何の作為もない。計算もない。幼い子は無心に母の名を呼ぶのである。そのように、仏を信じよという。後年、綽空改め親鸞となり、「歎異鈔」の中で、

『親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをこうむ

りて信ずるほかに別の仔細なきなり』

と述べているのは、この当時の綽空の心にしみとおった法然のことばであろう。よきひとは、法然のことをいう。綽空の信じ方は、まるで幼い子が母をもとめるように、純粋であり、すなおであった。別の仔細なきなりと告白しているように、そこに何らの計量もなかった。綽空は人々の背後で、法然のことばを、心に刻みつけるように聞いている。そんな綽空が、ふと、やわらかな、やさしい感じのような匂いを嗅いだ。それとなく顔を向けると、例の市女笠の女が微笑んでいる。綽空は、何となく頭を下げた。すでに知っている顔である。それが、挨拶の代りになった。市女笠の女は、綽空のひたむきな態度に、はげしく興味をそそられている。

三ヵ月が経った。

「師の坊の教えが、あやまりなく門弟に伝えられているかというと、そうではないのだよ」とある時、輪慧がそう言った。「そのことでは、師の坊も、ときどき心配のあまり口にされることがある」

「それは、どういうことでしょうか。師の坊のお教えをまちがえるなんて……？」

「口が滑るのだろうね。折角浄土宗をひろめようとかかりながら、つい、天台宗や真言宗を非難することになるのだ。その上、他宗のものと諍論をする門弟もあるらしい。中には、勢いに乗じて、改宗をせまる僧もあるようだ。師の坊は、ひどくそのことで心を悩ましていられる」

「教理の論議は、智者のすべきことであって、無智の者のなすべきことではないと、師の坊がつねづね仰言っていることを、私は肝に銘じております」

「浄土宗は、愚者になりて往生すと、あれほど師の坊が仰言っているのに……、門弟の中には、

気がつかずに、師の坊の教えに反している連中もいる。嘆かわしいことだよ」
法然は、こうも言っている。見解のちがった人達の修行は、敬うべきであり、決して軽んじてはならないと誡めている。
そして、綽空の上に半年が経った。
綽空は、いつまでも自分が吉水の庵室(あんじつ)に起居しているわけにいかないと判って来た。綽空のあとから、門弟となってはいってくる者もかなりある。綽空同様の境遇の僧もいる。それらの人々に、自分の席をゆずらねばならなかった。そのことを、輪慧に相談した。
「私もそのことを考えていた。綽空房も、いつまでも雑役に追いまわされていることもない。綽空房のように若い求道者には、おのれの時間が必要だ。京の町には、身寄りがあると聞いているが、そこに厄介になることは出来ないのかね」
「せまい家なので、厄介になるのは、心苦しいのです」
「どこかの寺に世話して上げられないこともないが、寺にはいれば、また自分の時間を持つことが窮屈になるだろう。いっそ、普通の家に厄介になった方がよいのではないか」
「そういう家には、私はいっこう心当りもありませんので……」
輪慧は、心当りをあれこれと思い出すのだったが、
「心やすい方がある。一度その方に話してみよう」
「お願いいたします。わがままを申して、申訳ございません」
「あてにしないで、待っていなさい」
或る日、法話が終って、庭に集まった人々がぞろぞろとかえりかけた時、

「才嶽さん」

と、輪慧が呼びかけた。その声で、急に市女笠が、大きく揺れた。笠の下の明るい顔が、輪慧をふりかえったが、やがて、人々をやりすごして近付いて来た。市女笠の女は、改めて輪慧に挨拶をした。

「お若いに似合わず、よくお通いになりますね」

女は、微笑しただけである。

「お父さんは、今日はお出かけではなかったのですか」

「はい、父は二、三日、臥せております」と、甘い声のひびきだった。

「どこがお悪いのか」

「何ですか、気分がすぐれないと申しております」

「お父さんに会って、お願いしようと思ってたことだが、お宅で、人をひとり、お世話願えないですか。お父さんとよく相談をしてみて下さい。お父さんもあなたも、熱心な浄土宗の信者なので、私は安心して、その人間をお任せしたいのです。信頼の出来る門弟の一人です。ご迷惑はおかけすまいと思います。輪慧が是非お願いするのだと、お父さんに伝えて下さい」

「かえりましたら、父にそう伝えます」

「お兄さんは、相変らず御所づとめですか」

「はい」

そのことを、綽空はあとになってから輪慧に教えられた。

「迷惑ではないでしょうか」

「才嶽千光さんといって、以前は摂政藤原兼実卿に仕えていた方だが、綽空房も知っているように、兼実卿が関白の職を辞められた時、才嶽さんも職をはなれて、ずうっと家にいられるようになった。その娘の福子さんは、宜秋門院に仕えていたが、これもまた、職をはなれて、お父さんと同様、家にいられる。淋しい家庭だから、綽空房が世話になれば、よろこんで下さるだろう。いずれ、近日返事があるだろう」

「兼実卿といわれますが、その方のために師の坊が『選択本願念仏集』をお書きになったのでしたね」

「そうだ。それには、いろいろとわけがあった」

綽空は、はからずも輪慧の口から、建久七年の政変をくわしく聞くことが出来た。兼実は、藤原忠通の第三子で、九条家の祖にあたるのだ。長寛二年内大臣となり、文治二年三月摂政にすすみ、建久二年十二月から同七年十一月まで関白の栄職にあった。兼実は、幼時から宗教的な環境の中で育っていた。兼実自身が病気がちなせいもあったが、早くから仏事に関心をもっていた。政務の間に、愛染明王を念誦したり、「法華経」を読んだり、阿弥陀仏の名号をとなえたりして、現世の安穏と、後世の安楽とを祈念していたものである。当時の貴族の間には、病気祈願や、現世の幸福のために神仏に祈る行事が流行していた。兼実も、その一人であった。

「あれは、たしか文治五年だったと記憶している。暑いさかりだった。初めて師の坊は、摂政兼実卿のお邸にまいられた。そして、浄土の道を説かれた」

兼実は、戒師として法然を信任し、授戒をうけたわけである。

「しかし、師の坊は、内心よろこんではいられなかった。権門の家に招待されたり、現世祈禱

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com